

(1) 単元名：ひきざん(2)

(2) 本時の目標：(十何)ー(1位数)で繰り下がりのあるひき算について、数図ブロックを操作し、計算方法を見つけることができる。

那覇市でも本格的な学校改革が始まった。前回9月に全教室の授業公開と焦点授業の校内研に参加させてもらった(RシートNo.129)。夏休みにおける理論研修を含めると今回が3回目の訪問となる。右の写真、校内のローカに掲示されている。支え合う学校と教室は、まさに「きき合う関係づくり」からである。



当然、子ども達だけのテーマになっていけない、まずは、教師が手本となって、子どもの声を聴く姿勢を示してほしい。子どもは教師の鏡です。先生が聴いてくれないのに、子ども達だけ「聴かされる」は理屈が通らない。教室は職員室の鏡です。職員が支え合わないのに、「教室では支え合え」これもまたおかしい。

掲示されたテーマが掲げるだけにならないように、互いに声掛けあっていきましょう。

[佐藤学「学校を改革する」P41より抜粋]・・・P38～P43をぜひ一読していただきたい。

学びの共同体では、「優れた授業」よりも「学びの質の向上」を追求する学校を目指す。授業のデザインは、できる限り授業者自身に任せ、子どもの学びの事実の省察(リフレクション)を中心に協議している。

新しい授業研究は、《デザイン》と《リフレクション》による学びの研究なのである。

研究授業の事前の研究よりも、事後の研究協議を重視する。 ※「学校を改革する」：岩波ブックレットNo.842より

授業開始：本日も黙想から始まる。心を落ち着かせる。呼吸を合わせる。

本時の課題をDTVに投影する。

授業者：何か気づくことは？

子：(一斉に気づきを語る。)

葉っぱが3つの色(緑、黄色、黄緑)

緑の柿がある

ウサギがカゴをもっている等。

柿なるまえの柿がある。(緑の柿)

授業者：かごは何に使うんだろう。

子：柿を入れる。

授業者：柿は何個ありますか？



写真①



写真②

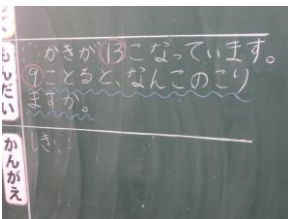
およそ、上記のやり取りから、本時の問題とめあてにつなげていった。視覚から入ることは子ども達ちにとって「分かりやすい」である。写真①、男の子に必要なことは、「教え育てなければ」と強固に構えるのではなく、彼を分かちあげる姿勢が大切です。ペア活動の時は夢中になってがんばっていました。

写真②、TVに見入る子ども達です。一生懸命気づきを語っていましたね。子ども達の言葉が重なっているのがちょっと気になりました。一人ずつ丁寧に聴いてあげましょう。

めあて音読→問題を書く→ペアで考える。

ペアにボードを1つ、

「まず、つぎに、だから」を使って説明する。かわいい子ども達ですね。一生懸命お友達と語ってました。ペアにすると子ども達の関係までほんとはよく見えてきます。先生方の観察視点もよかったです。互いの関係は「仕草と対話の言葉から探る。」しっとり聴き合うペアが多かったですね。



[1枚の写真]

教師がめあてや、問題文を確認している間に、もうペアで始めている子ども達がありました。正直ですね。この子達の気持ちわかりますか？…

「もうわかったから早くさせて！」  
くどい説明、しつこい確認は子ども達の天敵です。早めに活動に下ろすことが肝心！

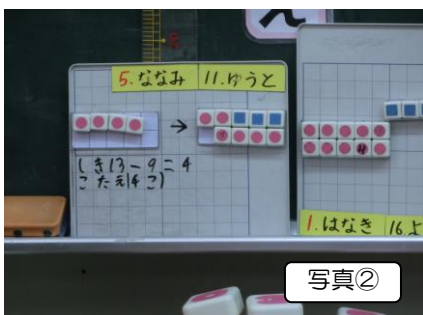


[デザインシート授業者より]

本学級では、1学期後半から学び合う場面を取り上げてきた、算数では、ペアで1つのブロック盤を使って一緒に考えようとする姿が見られるようになってきた。本時は緑の下がりのある引き算の第1時目なのでペアでブロックを操作しながらいろいろな計算の仕方(数えひき、減減法、減加法)を出させたい。学び合いの場面では、自分の考えを相手に伝えたり、友達の考えをしっかりと聞き、一緒に考えることができるようにしたい。



写真①



写真②

[13-9の仕方]

写真①、13の1の位の3に、10の位から6を持ってきて、10の位に4残る。だから答えは4。

写真②は、上の考え方とほとんど同じであるがブロックの表現の仕方に違いがある。

写真③、13の10のまとまりから9を引いて残った1を1の位の3にたす。だから答えは4。

写真④、上の二つの考えが両隣に並んでいる。→(ネタはそろった。)比べやすい。違いが見つけやすい。→ 思考しやすい→話しやすい

本時はいろいろな仕方を探る学習なので、教師の意図は達成されたと考えてよいのではないだろうか。

さて次である。伝える、きき合う、一緒に考えるは…どうであったろう。単に「分かったこと」の発表のやり取りでは「学び合い」にならない。互いの考えを「練り合い、吟味する」ことが共有の目的である。



写真③



写真④

[ペアによる算数操作的活動] → すべての子どもの学習参加を促し自分の考えが語られる。

低学年における「学び合い」はペアが有効である。子ども達にとって教師発信型の授業「聞かされて」「書かされて」「試されて」の授業は窮屈であり、先生の思い通りの活動や発言に縛られ、子ども自身の考えや、思いが語られない授業になってしまう恐れがある。国語の文学作品(物語)を読み込む時など顕著に教師の姿勢が子どもの発言に現れる。先生が答えてほしい「答え」探しの読みに陥ってしまいます。文学作品の作者は、読み手に様々な読みの広がりや深まりを期待し作品を提供しているのではないだろうか? 算数においても「子どもの尊厳」の考え方は同じである。僕なりの考え方を大事にし、その考えを語らせることである。一斉型の中では手を挙げて、指名されて、発表できる子どもはかなり限られてくる。そこで、小さな声の子どもも、誰もが語れる「ペア」は、子ども自身の考えを自分の言葉で語れる最良の学習形態である。下の写真、ペア活動の時の子ども達である。みんな夢中になって自分の考えを語る「何で?」の疑問や、「こんな方がいい」などの選択の対話が交わされる。同じ考えに共感し、さらに違いから学ぶのである。



写真⑤

写真⑤、ペアに張り付き子ども達の学びを探る教師達、事後の研究協議では笑顔で子ども達の様子が語られた。研究主任の話: 校内研修で先生方の笑顔を見たのは初めてじゃないかな〜!・・・私にとって最高にうれしい言葉でした。校内研は→「楽しくやる。楽しみながらやる。日常でやる。日常をやる。」

[発想の転換] 村瀬公胤 2012.11.24 沖縄タイムス たんぼほのタネ より

教育の分野で『子ども中心か』『教師主導か』2つの極を対比させて2項対立の考えがある。ちょっと賢い教師や、良心的な人は「両方大事ですから、バランスが重要です。」と結論を落ち着かせるでしょう。しかしバランスを取るというのは、現実的な解決策として良いとしても、実際のところ対立の溝は解消されていません。そんな時、「発想の転換」が必要です。『対立しているのではなく、相補う関係にある。』と考えるのです。子ども中心の教育を実現するためには、教師の配慮が必要ですし、教師が教たい事柄は子ども中心の活動に組み込まれて学ばれます。また、知識が確かに習得されるのは、子どもが自分で考えて応用してみたときであり、さらに、子どもは考えて応用するときにはじめて知識の必要性に気づくものです。

どちらが大事で選べなくて悩む前に、問題の立て方そのものが適切かどうかを考えてみましょう。そうすると深い溝に思えた対立でも、こちら側からもあちら側からも、それぞれ新しい工夫や知恵が湧いてくるのではないのでしょうか。